

小松正幸先生（元愛媛大学長）の執念・・・1.17 運転差止決定に一役 伊方「活断層」追う

四国電力伊方原発（愛媛県伊方町）のごく近くに活断層がある。小松正幸氏（地質学）が抱いた疑いは、1月に出た広島高裁の運転差し止め決定の要因にもなった。78歳の今も真実を追い求め、自宅から軽トラックのハンドルを握り、片道で半日かけて現場へ。ロープに身を委ねて崖を下り、海岸の岩場で断層を調べる。

小松氏がここまで執念を燃やすのは、9年前の福島での原発事故が理由だ。「原発は地震や津波でも安全だと聞き、容認してきた。浅はかだった。福島沖であれだけの大津波が起きることを、一部の地質学者は警告していたのに、私も含め大々的に問題視しなかった。なぜ事前にもっと警告できなかったのか。すごく反省している」

600m沖の疑い 指摘

中央構造線は古い「死んだ断層」とされ、生きているのは8^{km}沖の「中央構造線断層帯」だとされてきた。だが、600^m沖の断層が本当の中央構造線で、活断層かもしれない。もしその活断層で地震が起きれば、伊方原発が受ける揺れは大きくなり、今の地震対策では不十分となる。注目したのは半島の先、別府湾の海岸地形。1992年に京都大が調べた海底の地形は、中央構造線が造ったおわんのような「半地溝（ハーフグラーベン）」で、堆積物は比較的新しかった。中央構造線が最近動いた可能性を示していた。

国の地質調査推進本部は2017年、中央構造線の長期評



岩に取り付き観察



向きや構造を分析



2016年、四電が描いた伊方原発の地下構造の断面図を、知り合いの弁護士から見せられた。西南日本の地質を知っていれば中央構造線だと分かるはずの地質の境目に、なぜかそれが描かれていない。「これが試験問題への回答なら×だ。四電は何かを隠そうとしているのか。気づいたからには後に引けない。自分でやるしかない」

四電と当時の原子力安全・保安院は伊方沖の計13カ所で、海底に音波をぶつけて地下の構造を調べていた。その解析図には、岸から25^{km}沖までが描かれていなかった。

解析図で中央構造線を示している部分を延長させ、13カ所をつなぐと、従来は原発の8^{km}沖にあるとされていた中央構造線が、佐田岬半島の北岸ぎりぎりまで走っている疑いが浮上した。原発の600^m沖という近さ。さらに、半島の東西の地質図を見ると、別の探査で見つかった描かれていた活断層の位置が、小松氏が描いた中央構造線の延長線上に一致した。「びっくりした」という。

価を改訂し、小松氏の主張に沿う形で中央構造線の位置を描いた。小松氏は翌年、山口地裁岩国支部で運転差し止め仮処分申請の証人尋問に立ち、調査結果を説明した。今年1月17日、広島高裁は長期評価と小松氏の主張から、伊方原発のすぐ近くに活断層が存在する可能性を「否定できない」とし、運転差し止めを決めた。

「四電も私も、主張は仮説にすぎない。真実かどうか分からないなら同等に扱い、きちんと調べないと」と小松氏。

付記：2016年9月28日、大分地裁に本裁判を提訴（第1次原告268名）。この日夜、小松先生を大分にお招きして「記念講演」を行っていただきました。大きな縁があります。